



弔辞

著者	上野 直蔵
雑誌名	主流
ページ	i-iii
発行年	1975-09-16
権利	同志社大学英文学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000015254

弔 辞

わが敬愛するグラント先生 先生の霊よ わが哀惜の声に耳を傾けられよ

あなたは一九一一年 この世に生をうけられた そのあなたに 私が讃美歌の荘嚴なメロディーによって浄化されたこの広い聖堂に立って 告別の辞を申し述べようとは 夢想だにできなかったところであります 凡そものごとには順序があります 老いたるものは 年若き人より先に 天に召さるべきでありましょう それを思うと 私は神に何の故あって と問わずにはいられない 否 問責したい 何の故あって この自然の順序の法を混乱されたかを

しかしながら 心を平かにして 静かに思い返えせば 神は全知全能であられる すべてを知って 而も深慮をもって あなたを み許に召されたのであろう 私の愚かな思考力は これ以上の推測を不可能ならしめる 事ここに到っては せめて過ぎし日のことどもを追憶して あなたの霊に呼びかけたい

あなたが 同志社大学文学部英文学科に赴任されたのは 敗戦の直後 わが国では 人心打ちひしがれ 虚脱の状態を続け 一億総ざんげが叫ばれ 物資窮乏の極にあった昭和二十二年春のことであった そのような状況への あなたの来学は あなたの明るい性格と相まって 一道の光明を学園になげかけた あなたの学生への第一声は この二十二年の四月の朝入学式においてであった あなたは大声で赴任挨拶をされた 居ならぶ同僚 学生の驚いたことには あなたは 日本語でそれを話されたことであった その朝 四月としては珍らしい大雨が沛然と降り注ぎ 会場のチャペルの屋根を強く打った ために あなたの声は烈しい雨音にかき消された 式終って あなたは私に「雨のために自分の日本語の拙なさが さら

け出されなかって良かった」と三十歳代と思えぬ童顔に笑みを一ぱいたたえて「冗談をとばされた。私は私なりに、あなたが短時日の間に日本語をも習得し、不便な生活を覚悟してわざわざ来日されたあなたの勇気と強い使命感を考え、目頭を熱くし、発すべき声も出さずただうなづいただけであった。それから数えて二十七年間余、あなたは同志社のために営々と誠意をこめて、尽して下さった。私は教授陣容の整わなかった英文学科のために、ご援助願うべく、ずい分無理難題を持ちこんだにも拘らず、あなたは私の依頼にはすべて快諾して下さいました。煩鎖な学科目の担当をお願いしたこともあったし、大学院英文学専攻の設置に当ってはあなたに負うところ極めて大なるものがあった。感謝に堪えない次第である。

あなたの学風は、小事或は個々の文学作品にこだわることなく、よく大局に立って、文学を包括的、理知的に把握することを得意とされた点にあったと考える。あなたは、また、教育学を専攻された時期もあって、教授法にはずい分興味をもっていたようである。それがあなたの講義テストのやり方を通して、学生を裨益したところは甚大であり、且つ又大学のみならず、中学、高校等の先生方に、ホーム・ルームの持ち方などを指導された隠れた功績も忘れ去ってはならない。

省れば、同志社大学文学部英文学科、アメリカ人の専任教授は、ロンバード教授、ハントレー教授を経て、あなたが第三代目の宣教師教授であり、而も最も長期に亘って奉仕して頂いたことも、肝に銘じておくべきことである。

最後に、私は同志社退職後、久しく拝眉の機を逸していたが、去る六月の或る日、数年ぶりに、あなたから長文の手紙を受けとった。それには今後のあなた方の身の処し方などが細々と記されてあった。いわゆる予感というべきものがあつたのであろうか。暑中休暇あけのこの九月幾日かに拝顔することお約束していたのにもかかわらず、今は声なきあなたとなら

れ 語り合うことも叶わないこととなった 嗚呼

今となつては 神のもとに召されたあなたを 心静かにしのびつつ 後
に残されたご遺族の上に 神のご加護の豊かならんことを祈って 弔詞と
いたします

昭和四十九年九月二十五日

友人代表 上 野 直 蔵